

特集「対日協力政権とその周辺」
〈調査報告〉

水野梅暁・藤井草宣関係史料の調査と保存

広中一成・長谷川怜

はじめに

本稿で取り上げる水野梅暁と藤井草宣は、どちらも戦前から戦後にかけて日中仏教交流に尽力した日本人僧侶である。

近代日中仏教交流の歴史は、明治維新後まもない1873年7月、浄土真宗大谷派僧侶の小栗栖香頂おぐるすこうちやうが単身中国に渡ったことから始まった。小栗栖は明治政府の廃仏毀釈で荒廃した日本仏教を再興するため、かつて仏教が栄えたインドと中国と日本で「三国聯盟」を結成させることを目指した。

結局、小栗栖の願いは叶わなかったが、彼の活動は明治政府や大谷派を動かし、1876年7月、大谷派から新たに開教師が上海へ派遣され、その拠点として、「真宗東派本山上海別院」、通称上海別院が創建された。

大谷派開教師らは、上海や北京に教育機関を設けて、若い中国人僧侶らを教育したり、著名な僧侶と交流を重ねたりすることで、中国仏教界との人的繋がりを作りあげた⁽¹⁾。

民国期に入ると、中国では古い寺院や廟を壊して教育機関に変えるという、廟産興学運動が起り、一時期、仏教が迫害の対象となった。そのなかにもあっても、日中の仏教交流は続き、1925年、東京で日中両仏教徒代表者による東亜仏教大会が開かれ、日中仏教交流の進展は頂点に達した。

しかし、満洲事変勃発後、日本の中国進攻が激しくなると、「皇国仏教」を掲げて戦争の支持に回った日本仏教界に対し、中国仏教界は抗戦を訴え、日中仏教交流は停滞した。

近年、近代日中仏教交流の歴史や、日本人仏教徒の戦争協力についての

(1) 蕭平 (2003) 『近代中国仏教的復興』 広東人民出版社、60-72頁。

分析が進むなかで、これらに関係した水野梅暁や藤井草宣の思想や活動に言及した研究がいくつか発表された。

たとえば、水野梅暁については、栗田尚弥⁽²⁾が東亜同文書院に係わった人物の研究のなかで、書院卒業生の水野を取り上げ、なぜ水野が日中仏教交流に携わるようになり、日本の中国進攻に理解を示したのかという問題を論じた。また、岡村敬二⁽³⁾や柴田幹夫⁽⁴⁾も水野の論考や日本の外交文書を使って、水野が満洲国建国後、なぜ日満文化交流に係わっていったのか検討した。

藤井草宣については、辻村志のぶ⁽⁵⁾が近代日本仏教の海外布教の一例として、藤井の中国での活動について分析した。広中一成⁽⁶⁾は1934年7月に日本で開かれた第三回汎太平洋仏教青年会大会に関連する史料を用いて、同大会で藤井が果たした役割について論じた。

これら研究の問題点を挙げるなら、水野と藤井にまつわる一次史料による実証的考察が充分行われていないことにある。公刊史料としては、中村義が水野の遺した日記を書き起こしたものや、生前の水野と親交のあった松田江畔が、水野の関係者の証言をまとめた追想録があるが、藤井についてはそのような成果がない。

今後、水野と藤井の活動が歴史的にどのような意義をもっていたのか検討するにあたっては、基礎的作業として日本に遺っているふたりの史料を整理し、可能な限り公開し今後の研究に資する必要がある。

以上の問題意識から、三好章愛知大学現代中国学部教授をはじめとする研究者、および大学院生らで、2012年から2014年にかけて、愛知県豊橋市大村町の方鏡山浄円寺にある藤井草宣関係史料、ならびに埼玉県飯能市

(2) 栗田尚弥 (1993) 『上海東亜同文書院一日中を架けんとした男たち―』新人物往来社、122-142頁。

(3) 岡村敬二 (2006) 『日満文化協会の歴史 草創期を中心に』、私家版。

(4) 柴田幹夫 (2001) 「水野梅暁と日満文化協会」、『仏教史研究』第38号、龍谷大学仏教史研究会、46-69頁。

(5) 辻村志のぶ (2002) 「戦時下一布教使の肖像」、『東京大学宗教学年報』第19号、東京大学文学部宗教学研究室、93-109頁。

(6) 広中一成 (2009) 「第二回汎太平洋仏教青年会大会における中国代表团招致問題―藤井草宣研究の一環として―」、『愛知大学史研究』第3号、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・オープンリサーチセンター、117-126頁。

上名栗の白雲山鳥居観音にある水野梅暁関係史料を、管理者の許可のもと調査・整理を行なった。

本稿の目的は、その史料整理の起こりから、実際の作業状況までをできるだけ詳しく報告することにある。

なお、本稿の執筆は、「はじめに」と浄円寺の部分については広中一成が、鳥居観音の部分と「おわりに」は長谷川怜が担当した。広中は両方の史料整理に携わり、長谷川は水野梅暁の史料整理にのみ参加した。

I 浄円寺における藤井草宣関係史料の調査について

1. 浄円寺との係わり

本章では、2012年から2013年にかけて、愛知県豊橋市大村町の浄土真宗大谷派寺院、方鏡山浄円寺で行った藤井草宣関係史料の調査について、その経緯をまとめる。はじめに、なぜ筆者（広中一成。以下、私）が浄円寺と係わり合いを持つようになったのか述べる。なお、史料調査に携わった一部関係者には敬称を付する。



[写真1]：浄円寺本堂

浄円寺は、1534年、山科本願寺第9世法主実如の門下にあった、越後

出身の了証によって創建された⁽⁷⁾。浄円寺はながらく豊橋市花園町にあったが、1971年、現在の場所に移転した。[写真1]

2008年9月、筆者は愛知大学東亜同文書院大学記念センターリサーチアシスタントの職を得て、創立期の愛知大学と豊橋との関係について調査を始めた。

関連史料を調べるなかで、筆者は以前に浄円寺の住職を務めていた藤井草宣(本名は静宣)が、愛知大学の創設を支援したひとりであったことを知った。

藤井草宣は⁽⁸⁾、1896年、愛知県碧海郡高岡村の真浄寺住職、藤井至静の長男として生まれた。1904年、至静は豊橋市の浄円寺で住職を務めることになり、草宣も至静とともに浄円寺に移り住んだ。

1922年、大谷大学を卒業した草宣は、宗教専門紙の『中外日報』で記者を務めたあと、1925年、台湾・朝鮮・中国の仏教徒を日本に招いて開かれた東亜仏教大会に水野梅暁の秘書として参加した。

東亜仏教大会に携わったことを契機に、中国への関心を深めた草宣は、1928年、水野の働きかけで外務省対支文化事業部派遣の給費生に任じられ、上海の東亜同文書院に支那語聴講生として3年間留学した。その後、1943年に帰国するまでの間、草宣は浄土真宗大谷派中支開教監督、東本願寺北京別院輪番、中支南京東本願寺主任兼中南支開教監督部出仕、東本願寺上海別院輪番などを務め、戦時期中国における浄土真宗大谷派の開教活動の中心人物として活躍した。

戦後、草宣は愛知大学の創設を支援する一方、地元紙に論説を发表或し、歌集を刊行したりして、地域文化の発展に貢献した。

藤井草宣の中国での活動については、上述の辻村志のぶの研究に詳しい。しかし、草宣と愛知大学との関係についてはなお不明な点が多い。そのため、私はリサーチアシスタント着任早々、浄円寺に連絡し、草宣に関しての取材を申し込んだ。

(7) 豊橋寺院誌編纂委員会編(1959)『豊橋寺院誌』豊橋仏教会、131頁。

(8) 以下、ことわりのない限り、藤井草宣の経歴については、広中一成(2009)「第二回汎太平洋仏教青年会大会における中国代表招致問題—藤井草宣研究の一環として—」『愛知大学史研究 2009年度版』第3号、愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター、117頁を参照した。

2008年11月21日、筆者は初めて浄円寺を訪問し、前住職で藤井草宣の長男にあたる藤井宣丸氏とお会いした。宣丸氏は大谷大学卒業後、浄円寺で修行に励むかたわら、創設されたばかりの愛知大学で副手を務めた。

私は宣丸氏から藤井草宣が若い頃、歌人を目指して若山牧水や倉田百三と交流したことや、愛知大学の創設を前に、草宣の計らいで浄円寺内に仮大学事務所が設けられ、本間喜一ら大学立ち上げに奔走した教授らを支えたことなど、これまであまり知られていなかった貴重なエピソードをいくつかもうかがった。

その後も、私は何度か浄円寺を訪ね、宣丸氏から藤井草宣のことについて聞き取りを続けた。あるとき、草宣と水野梅暁との関係について話が及んだとき、宣丸氏は席を立つと、隣の部屋からひとつのバスケットを持ってきた。その中には、水野梅暁が記した書簡数十点が収められていた。

宣丸氏によると、草宣と永く親交のあった水野は、亡くなる少し前、特別に手元に残していたそれら書簡を形見として草宣に譲り渡した。書簡の差出人には、犬養毅や蒋介石といった日中両政府の要人、内藤虎次郎（湖南）や服部宇之吉など日本を代表する中国研究者、法隆寺管主を務めた佐伯定胤や、宗教学者の高楠順次郎など著名人ばかりであった。これらを見ただけでも、水野の交友関係の広さがうかがい知れた。なお、水野が数ある書簡のうち、草宣に贈った書簡をなぜ特別なものとしたのかは、いまだはっきりしない。

私は目の前に置かれたそれら書簡の束にただただ圧倒されるばかりであった。しかし、このとき、書簡以外に藤井草宣が遺した史料が浄円寺に保管されていることは、宣丸氏から告げられることはなく、私も問いかけるまでには至らなかった。

2. 藤井草宣関係史料との出会い

2011年11月、私は彩流社から『「華中特務工作」秘蔵写真帖——陸軍曹長梶野渡の日中戦争』を刊行した。同書は、日中戦争下の中国安徽省で、中国人住民に対する宣撫工作を行った元陸軍曹長の梶野渡氏が保管していた当時の写真、ならびに梶野氏の証言をとおして、戦場の実相を明らかにしたものである。

梶野氏は郷土史家として著名で、卒寿を越えた今でも、講演や執筆活動に力を注いでいる。また、戦争の記憶もきわめて明瞭で、拙著作成にあたり、私がインタビューをお願いした際も、梶野氏は面白おかしくエピソードを交えながら、詳細によどみなく戦争体験を語り続けた。

私は、この梶野氏の生の証言を、ひとりでも多くの方に直接聞いてもらいたいと思い、三好章先生にお願いし、同年11月19日、愛知大学車道校舎コンベンションホールで、「愛知大学国際問題研究所第一回歴史講演会語り継ぐ戦争 92歳、梶野渡の日中戦争・『華中特務工作』の日々」と題する講演会を開催した。

当日、会場には100人以上の聴衆が集まり、スクリーンに映し出された戦場の写真とともに語られた梶野氏の貴重な証言に耳を傾けていた。このとき、私は進行役のひとりとして三好先生とともに登壇した。

講演会終了後、私が壇上を降りると、ふたりの男性がフロアから歩み寄ってきた。私と初対面の二人は、S准教授とM講師（ともに当時）で、ともに中華民国期の問題をテーマとする研究者であった。お互い挨拶を済ませると、私はS先生から藤井草宣について知らないかと質問を受けた。S先生は研究を進めるなかで、草宣の著作を目にし、それ以後、藤井に関心を持っていたという。

私は、S先生にこれまでの浄円寺や宣丸氏との関係を説明し、S先生の求めに応じて、M先生も伴って、近日中に浄円寺を訪問する約束を交わした。

その後、私は宣丸氏にアポイントメントをとって、2012年2月18日、S先生とM先生を伴って浄円寺を訪れた。宣丸氏にごあいさつをしたあと、応接間に通された私たちは、時間の許す限り、宣丸氏に父草宣の思い出や、印象に残っている出来事などをうかがった。

この会話のなかで、たまたま藤井草宣のゆかりの品物について話が及んだとき、宣丸氏は、奥の部屋に置いてあった数冊のアルバムを手に取り、私たちに見せてくれた。このなかには、草宣の顔写真や家族との写真、草宣が1934年に鈴木大拙と一緒に中国の寺院を巡ったときの写真⁽⁹⁾などが

(9) このときの視察の様子と写真は、鈴木大拙（1934）『支那仏教印象記』森江書店にまとめられている。

取められていた。

藤井草宣にまつわる宣丸氏の証言は、私たちの知らない歴史事実がいくつもあり、たいへん興味深かった。また、アルバムの写真も藤井草宣を研究するうえで、きわめて重要な史料となるものであった。そのため、私たちは、後日、浄円寺を再訪し、正式に宣丸氏にインタビューを採らせてもらうことにした。

最初の浄円寺への訪問から3ヶ月近くたった、5月11日、私はS先生とふたりで浄円寺を訪れた。前回と同様、私たちが宣丸氏から藤井草宣についてお話をうかがっていたところ、宣丸氏は、寺の庫裏にまだ整理されていない草宣の遺した書類や書籍が残っていると打ち明けてくれた。このときまで、私たちは藤井草宣の史料が今でも浄円寺に保管されていたことを知らなかった。私たちは、ぜひその史料の整理をさせてほしいと、その場で宣丸氏にお願いし、了承を得た。

浄円寺をあとにした私たちは、さっそく、一緒に史料整理をしてくれる協力者を募った。そして、呼びかけの結果、作業に参加することになったのは、S先生、M先生、私のほか、三好先生とそのゼミ生二人、S先生のゼミ生二人、ならびに愛知学院大学大学院生（当時）の大野絢也氏の計9人であった。

なお、後日になって、浄円寺にある藤井草宣関係の史料は、10年ほど前に仏教関係の研究者グループによって、いちど調査が行われたものの、その後、進展のないままであることを宣丸氏からうかがった。

3. 史料整理の開始

2012年7月30日午前、JR豊橋駅に集まった9人は、私と大野氏が用意した車両に分乗して浄円寺に向かった。

史料整理の作業は、2日間の予定で行われた。初日は猛暑であったが、さいわい、宣丸氏の配慮で、冷房の効いた広い仏間が用意され、快適な環境で作業を行うことができた。

作業は、まず史料の全体像を把握するため、手分けして庫裏の中から史料の入った段ボール箱を取り出すことから始まった。その作業の途中で、寺の地下倉庫に古い雑誌があることがわかり、そこからは藤井草宣が手に



[写真2]：浄円寺における史料整理の様子

入れたと思われる戦前の仏教に関する雑誌だけを持ち出した。

9人全員が手際よく動いた結果、数時間のうちにすべての箱が仏間に並べられた。そして、箱の側面に番号をつけながら数をかぞえた結果、箱は全部で32個あることがわかった。[写真2]

しかし、仏教の知識に乏しい私たち9人が、これら大量の史料の価値を判断しながら、いちどに整理することは不可能であった。そのため、私たちは実証史学の見地から、藤井草宣の手が直接加わった、スクラップブック、草稿、書簡、句集の入った4種類の一次史料計10箱を、ひとまず整理の対象にした。

史料整理2日目の31日、再び浄円寺の仏間に集まった私たちは、二人一組になって、4種類の史料を箱から取り出して、ひとつひとつ中性紙封筒に納めた。私は大野氏と草稿類2箱の整理を行った。なお、中性紙封筒を含む、私が手配した史料整理で使用した消耗品の費用は、2012年4月から始まった、愛知大学国際問題研究所のプロジェクト「対日協力政権とその周辺」から支出した。

この2日間の史料整理に入る前、私たちは浄円寺にある史料全体を確認したうえで、それらが歴史的価値のあるものとみなすことができた場合、今後の研究に生かすために、史料の目録を作成し、さらには史料をすべて

デジタルデータにして、閲覧をしやすくする必要があると考えていた。

作業を終えて、私たちは整理した10箱については、十分に歴史的価値を備えていると判断した。そして、宣丸氏に私たちの計画を提案したところ、快く承諾していただいた。

その後、S先生、M先生と私は、メールでやり取りしながら、どのように目録を作成していけばよいか話し合った。その結果、目録作成は史料整理のときと同じく、種類別に二人一組で手分けして行い、目録の体裁はS先生が以前に別の研究で使用した目録の形式を参考とすることにした。

しかし、目録を作成するために、いちいち私たちが浄円寺にうかがって史料を見ることは、宣丸氏をはじめとする関係者に多大な迷惑をかけるだけでなく、作業の過程で、史料の劣化を引き起こす恐れがあった。

そのため、私たちは9月7日と8日の2日間、浄円寺にうかがって、整理し終えた史料を封筒から取り出し、ひとつひとつデジタルカメラで撮影した。そして、今後は史料のデジタルデータを使って目録を作成することにした。

もうひとつの計画である史料すべてのデジタルデータ化は、三好先生との話し合いにより、目録完成後、愛知大学国際問題研究所プロジェクトの費用を使って、豊橋にある愛知大学東亜同文書院大学記念センターで作業を行うことになった。

4. 今後の展開

目録作成は、当初2014年度中に完了し、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター報』に掲載を予定していた。しかし、諸事情で作業が遅れたことから、2016年度以降、完成した順に公開していくことにしている。

今後も、関係者と連絡をとりあいながら目録の完成を急ぐとともに、史料のデジタルデータ化の実現を目指す。また、今回の作業で整理の対象としなかった写真については、2013年4月、私が宣丸氏の許可を受けてアルバム一式を借り受け、豊橋の東亜同文書院大学記念センターでデジタル撮影をした。これら写真も関連史料を使って歴史的裏づけをとりながら公開したいと考えている。

II 鳥居観音における資料調査と保存処理

1. 資料発見の経緯と資料について

本章は、水野梅暁関係写真資料の調査および保存処理に関する報告である。同資料は、埼玉県飯能市上名栗に所在する鳥居観音⁽¹⁰⁾が所蔵・保管している。筆者（長谷川怜）は2013から2015年にかけて調査と保存処理に携わってきた。以下、資料の概要と、筆者が関わった作業等について述べたい。

そもそも、鳥居観音に所蔵されている水野梅暁関係資料へのアプローチは、1980年代に辛亥革命研究会によって行われた。中村義による「水野梅暁関係資料調査」（1984）によれば、1984年10月13日、14日に鳥居観音での関係資料調査が行われ、写真については「すでに調査した……仏教布教の面では、両国宗教人の交流に尽力したことが、写真の中にもうがわれる⁽¹¹⁾」とされている。この時点において、鳥居観音に水野梅暁関係写真が所蔵されていること、またその写真に仏教関係者を中心として日中の様々な人物が写されていることが明らかになっている。本文中には、写っている人物名の一部も記載されている。ただし、この時はあくまでも概要把握に留まり、詳細な目録の作成や写真全体を通じた研究への活用はなされていない。

その後、鳥居観音所蔵資料の調査・研究は同研究会によって継続され、近年では藤谷浩悦先生（東京女学館大学）が鳥居観音の川口泰斗氏を窓口として実施されていた。ただし、すでに書いたように、写真に関する詳細な調査・分析は未着手であり、その後約30年を経てこれらの写真の保存状態がいかなるものであるかを確認することを含めて、今回の調査の実施に至った。

2013年3月、筆者は三好章先生（愛知大学）、S先生、広中一成氏（三

(10) 白雲山・鳥居観音は、地元出身の実業家・銀行家である平沼彌太郎によって開かれた寺院である。宗派を持たない単立寺院で、聖観音を本尊とする。彌太郎の母は観音信仰に篤く、その遺言で観音堂の建立を願ったことが鳥居観音の起源である。1940年に最初の観音堂（現在の恩重堂）が完成し、戦中・戦後にわたって様々な施設が徐々に建設され現在に至る。鳥居観音の詳細については同寺院HPを参照。<http://www.toriikannon.org/>

(11) 中村義（1983）「水野梅暁関係資料調査」、『辛亥革命研究』第3号、辛亥革命研究会、75頁。

重大学)が実施する鳥居観音における資料調査に同行した。筆者は、2012年末より、広中氏の紹介によって、水野が受け取った書簡(水野梅暁関係文書)を輪読する研究会に参加していた関係もあり、今回の調査に同行することとなった。この時の調査は、①鳥居観音における資料の概要を把握する、②写真資料の保存状況を確認する、③今後の調査の方向性について相談する、の三点を目的としており、資料目録の作成や資料の読解等は行っていない。

本調査は、鳥居観音境内に設置されている「鳥居文庫」を対象として行った。同文庫内には、仏像や民俗資料など鳥居観音の開祖である平沼彌太郎⁽¹²⁾にまつわる資料の他、古文書や書幅、写真資料などが所狭しと展示されている。



[写真3]: 鳥居観音内の展示 (2013年当時)

この一連の資料の中に水野梅暁の関係資料が含まれているのである。それでは、そもそも鳥居観音に水野梅暁にまつわる資料が所蔵されることになったのはなぜであろうか。

水野梅暁は1877年、福山藩士・金谷俊三の四男として広島県深安郡福

(12) 平沼彌太郎 (1892~1985) は埼玉県出身の実業家・銀行家。林業経営に携わり、戦時中は木材統制会社の常務取締役を務めている。銀行経営でも手腕を発揮し1949年~1961年にかけて埼玉銀行頭取に就任。また、1947年には参議院議員(自由党)として国政にも関わった。なお、鳥居観音の本堂に安置される本尊(聖観音)をはじめとする七観世音菩薩など、寺院の仏像の多くは彫刻家として桐江の号を持つ彌太郎によって製作されたものである。

山町(現福山市)で生まれた。13歳で出家、広島県神石郡にある法雲寺(曹洞宗)の住職である水野桂巖の従弟となり水野に改姓する。その後、京都の大徳寺(臨濟宗)で修業する期間を経て上京、哲学館(東洋大学の前身)で学んだ。

1897年に根津一の知遇を得たことを契機に東亜同文書院の書生として上海に渡り、中国での活動を開始した。その後、湖南省長沙に僧学堂「雲鶴軒」を創設して布教を行いつつ、中国布教権問題などに取り組み、中国国内で仏教者にとどまらない広範な人脈を築いていく。その中には中国革命の中心的人物である孫文や黃興、その後継者である蔣介石なども含まれていた。大谷光瑞と知り合ったことをきっかけとして本願寺派に転じ、その頃からジャーナリズムの世界でも頭角をあらわしていく。1921年には東方通信社の調査部長として『支那時事』編集主幹となり、さらに1924年には日華実業協会や外務省などの援助を受け支那時報社を創設した。

梅暁は上述のごとく、仏教者でありジャーナリストであったが、彼の活動の根幹には、仏教を通じた日中の交流実現というテーマが存在していた。

その目的の実現のため梅暁は東亜仏教大会の開催(1925年)と訪中仏教団の中国派遣(1926年)という大きな事業の中心人物となり、特に後者の事業においては「日本仏教徒訪華視察団」を率いて中国仏教との交流、要人との会合を行った。ここでは同事業の詳細については扱わないが、その後も梅暁は様々な活動を続け、1932年に満洲国が「建国」されると内藤湖南らと共に日満文化協会にも深く関与し、理事として文化事業の制定等に携わっている。

さらに、日中戦争中の1942年(昭和17年)、南京で発見された三蔵法師の遺骨の日本への分骨と愛知県名古屋市千種区に所在する日泰寺での仏舎利との対面などにおいても水野は関わりを持った。戦後の梅暁の活動の大半はこの遺骨の安置場所を求めての全国遊説に費やされ、1949年(昭和24年)、埼玉県慈恩寺に舍利塔を建立するが、ここでは詳述しない⁽¹³⁾。

梅暁は1931年に脳溢血をおこし、その静養地として主治医の縁戚である平沼彌太郎を訪問して滞在した。こうして平沼と梅暁の交流ははじまり、

(13) 水野三蔵法師の遺骨発見と日本への分骨の経緯等については、坂井田夕起子(2013)『誰も知らない『西遊記』—玄奘三蔵の遺骨をめぐる東アジア戦後史—』、龍溪書舎を参照。

その関係は梅暁が1949年に三蔵法師の舍利塔を建立した慈恩寺で死ぬまで途切れることはなかった。戦時中に梅暁は貴重品や写真類を平沼家に疎開させており、それらの資料が戦後になって一括して鳥居観音で保存されることとなったのである。

平沼彌太郎との縁から鳥居観音にもたらされた梅暁の資料は、本人が使用していた硯や落款、茶器といった日常用具から、梅暁と交流のあった中国要人の書幅など多岐にわたり、とりわけ写真資料はその白眉である。これらの写真は梅暁と交流のあった孫文や蒋介石といった近代中国の政治家や軍人のものであり、その一部は鳥居文庫内の展示ケース内に収められ一般にも公開されている。鶏卵紙写真からゼラチンシルバープリントまで幅広い時代を含んでいることが分かった。

今回の調査では、展示ケース下の戸棚や天井裏の書棚等にも未整理のまま置かれている約千点におよぶ写真群の全てを確認した。それらの写真の多くは一見しただけでも劣化が進んでいることが確認でき、かつ湿度の高い状態に置かれていたことから、早急な保存処置を施すべきことが求められた。

筆者は、これまでも写真を含めた図画像資料の調査⁽¹⁴⁾に関わっていた経験から、水野梅暁関係写真の整理と保存処置の実践を担当することとなった。

2. 調査概要と目録作成作業

第1回の調査(2013年3月)における現地の確認を踏まえ、写真資料全点の目録作成およびデジタル化、そして適切な保存処置を行うべきことが議論され、同年9月に第2回目の調査が実施された。この調査には、広中氏および筆者の他に大野絢也氏が加わることとなった。

当初の計画は、鳥居観音において全ての写真を別室に移動し、その場でスキャンを行うとともに簡単なクリーニングを実施、元の場所へ戻すというものであった。しかし、写真の多くが台紙に貼られた大判(A3サ

(14) 筆者の携わった図画像資料研究の成果として、学習院大学編(2012)『絵葉書で読み解く大正時代』彩流社、尚友倶楽部・長谷川怜編(2013)『貴族院・研究会写真集』、芙蓉書房出版がある。

イズ以上)であるため、持ち運びできるサイズのスキャナでは用をなさないこと、かつ数百点に上ると予想される(後に約千点と判明した)写真全てのクリーニングを調査日のみで完了することは到底不可能であるという結論に達した。

そして、鳥居観音側との交渉の結果、筆者が所属する学習院大学の研究室に一旦全ての写真を運び、そこにおいて嚴重に保管しつつ、目録作成、クリーニング、そして電子化を実施することとなった⁽¹⁵⁾。学習院大学を保管場所としたのは、鳥居観音側の意向により、資料を地理的に近い場所に保管しておくという理由に加え、筆者が所属しているため部屋が自由に使用でき、また大型スキャナなどの機器の設備が整っていることによる。

調査当日は、段ボール、薄葉⁽¹⁶⁾、中性紙封筒、史料拭き取り専用不織布(テックリン)、養生テープといった史料保存用品を携えてレンタカーで鳥居観音へ向かった。筆者を含む調査者は、まず写真が保管されている場所ごとに群番号を振り、保管状況を撮影した後に1点ずつ薄葉で包むか、または中性紙封筒に入れていった。

展示ケース下のスペースに保管されていた写真台紙からは、文化財害虫である紙魚およびシバンムシが大量に発見された。特に紙魚の数は非常に多かったため紙魚の検出された写真台紙を野外に持ち出してブラシ等で簡単にはらい、それらは他の写真とは別の段ボールに移し替えることとした。また、保管場所の付近には野ネズミの死骸もあり、ネズミによる齧害も不安視されたため、調査後は写真を元の保管場所に戻すのではなく、汚損の恐れのない場所に全点を移して保管することを鳥居観音側へ打診、了承された。[写真4]

ほぼ1日をかけて写真を群ごとに段ボールへ入れ替え、借用(学習院への持ち出し)準備を整えることができた。写真の借用に際して行った内容

(15) 学習院大学は東京都豊島区目白に所在。写真は鉄筋コンクリート造ビル6階で保管することとした。

(16) 薄葉は、博物館等において資料の梱包に用いられる美濃和紙。一般的に「薄(うす)」と呼ばれることが多い。繊維があることから通常は写真の梱包には必ずしも向いているとはいえないが、調査においては他の写真と接触することでほこりやカビなどで相互に汚染されることを防ぐために臨時的に用いた。なお、使用にあたっては専用のペンを使い鶏卵紙写真に悪影響を与えるアルカリ性ではないことをチェックしている。



[写真4]：鳥居文庫内における写真の保管状況（2013年当時）

を改めてまとめると以下のごとくである。

①現状回復ができるよう写真資料の保管状況を撮影によって記録すること、②保存されていた場所に番号を振り、それを目録番号と一致させること、③移動に際しても資料が傷まないよう丁寧に梱包すること、④借用中は、鍵がかかり、かつ湿度・温度が適切に管理された部屋で保管すること、⑤デジタル化にあたっては資料を丁寧に取扱い、かつ原秩序の回復ができるよう重ね順等を変更しないこと。

その日のうちに学習院大学内の研究室へ写真の移動を終え、翌日より早速目録の作成に着手した。

3. 保存処置とデジタル化

目録作成にあたっては、群別の親番号に加え、保管されていた順（重ね順）の枝番号を振ることとし、この段階では写真の年代や種別（鶏卵紙、ゼラチンシルバー等）での分類は行わないこととした。

また、資料名（写真タイトル）は、裏書等のあるものは原文（ママ）を資料名としたが、記載のないものに関しては調査者が任意のタイトルを付し〈 〉を付記した。年代に関しても同様に入力したが、撮影対象や年代が一切不明の写真も多く、それらは項目を空白にしたまま、調査を進めなが

ら書き加えるという方針を立てた。

実際の作業は、段ボールから写真を取り出す者、入力する者、写真番号とタイトルを封筒に記入して箱へ戻す者、という流れで行い、汚れの激しい写真は都度テックリンや紙製ウエス（キムワイブ）で簡易クリーニングを実施した。さらに、酸化した台紙と写真が直接接触合っている場合には、資料の間に写真専用の間紙または薄葉を挟み込み、劣化の進行を少しでも食い止めるように留意した。

なお、文化財害虫が検出された写真に関しては、真空パックの中に脱酸素剤（エージレス）と共に入れて殺虫を行ったが、一部、大判のためパックに入らない資料については殺虫剤（ブンガノン）を投入して密閉した段ボール内で保管するなど、可能な限りの保存措置を実践した。しかし、アーカイブズ施設や史料館のように史料保存のための環境が完全に整った場所での作業ではなかったため、100パーセントの保存処置には至らなかったことは反省点である（当然ながら、借用中に極端な写真の劣化や汚損、乾燥による反りなどの問題は発生していない）。

目録に記載した写真から順にデータ化を進めたが、調査者3名のうち2名が愛知県在住ということもあり、数度にわたる上京を繰り返して会合しながら作業せざるをえず、目録作成作業の間に筆者が大型スキャナでデータ化を進めるといふ非効率な進行となった。当初の予定からは遅れたものの、2014年7月にはデータ化を完全に終了したため鳥居観音への資料返却を行った。[写真5]

鳥居観音への返却の際には、資料番号を振った中性紙封筒に全ての写真を1点ずつ入れ、さらに中性紙段ボールに収めた状態で引き渡しを行った。なお、中性紙封筒は当初、諸般の事情により中古のものを使用していたが、返却にあたり愛知大学国際問題研究所の予算で新規購入し、新たな封筒に収め替えている。[写真6]

デジタル化の概要についても記載しておきたい。デジタル化にあたっては、大判の台紙を含めた写真の全体を記録できるように大型スキャナ（非接触型）を使用し、スキャンの際の解像度は400dpi、保存形式はjpgとした。

スキャンの際には、目録と対応する写真番号を記入したターゲットを同じフレームに収めてデータ管理を容易にした。



[写真5]：水野梅暁関係写真の一例



[写真6]：学習院大学での作業風景

データ化の完了と返却後、写真データには目録に従い番号（親番号・枝番号）を振った。さらに当初の群番号を保持しつつも、写真の性格や内容、すなわち撮影場所や種別（テーマ）に沿って振り分けを行い、写真資料の分類に着手した⁽¹⁷⁾。



[写真 7]：非接触型スキャナを用いた写真のデータ化作業

4. 今後の展開

これまでの作業により、仮目録と画像データとの対応が可能となった。しかし、未だ詳細の不明な写真も多く存在することから、広中・長谷川に加え、新たに調査者として松下佐知子氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター客員研究員）の協力を得て引き続き調査・研究を進めている段階である。すでに3名の共同執筆により「鳥居観音所蔵 水野梅暁関係写真史料の紹介」（『愛知大学東亜同文書院大学記念センター報』第23号2015）を発表し鳥居観音所蔵 水野梅暁関係写真の中から選定した数点の写真を関連資料と共に紹介した。同稿の執筆過程において、岡部長景（貴族院議員）に宛てた水野梅暁の書簡や関連写真などの発掘が相次いだ。現在はこれら新資料をも活用し、従来の調査・研究成果を基礎として水野梅暁関係写真に詳細な解説を付した写真集として刊行すべく、鋭意作業中である。

(17) 振り分けは、写真集の編集に向けたものであり、0：使用しない、1：仏教関係、2：中国革命関係、3：満洲関係、4：関連人物関係、5：その他、とした。

また同時に、水野による著作目録や詳しい年譜の作成も進めている。

おわりに

近年、歴史研究において図画像資料、とりわけ写真を活用した研究は重要度を増している⁽¹⁸⁾。写真を研究上の「史料」として扱う場合には撮影された日時や場所、被写体、撮影者といった情報を明らかにすることはもちろん、その写真が撮影された背景事情を別の史料によって確認することが必要とされるであろう。しかしまた、写真を見ることで初めて明らかになる事実も多くあり、写真を1つの証拠として一次史料へさかのぼることができるはずである。

しかしながら、今回報告した水野関係写真にもいえることであるが、明治から昭和戦前期に撮影された写真は劣化の恐れが多分にあり、とりわけ鶏卵紙写真にはその傾向が顕著である。写真を調査する際には、目録を作成するだけでなく、同時に保存処置とデジタル化を行い後世に残すための努力も必要であろう。

近代仏教史、日中関係史において水野梅暁・藤井草宣が重要人物であることは間違いなが、その足取りや人脈などにはまだまだ不明な点も多く残されている。浄円寺および鳥居観音所蔵の写真資料群は、両名のたどった足取りにおける未知なる部分に光を当てるものであり、本写真の調査を契機として関連資料が発掘されたように、当該分野の研究の進展も期待される。

(18) この数年の公刊書籍に限定しても、広中一成(2011)『「華中特務工作」秘蔵写真帖——陸軍曹長梶野渡の日中戦争』彩流社、長南政義・森重和雄・川崎華菜解説(2013)『日清戦況写真』国書刊行会、大久保利泰監修・森重和雄・倉持基・松田好史編(2013)『大久保家秘蔵写真』国書刊行会、工藤洋三・金子力編(2013)『原爆投下部隊』、前掲『貴族院・研究会写真集』、研谷紀夫(2015)『皇族元勳と明治人のアルバム 写真師丸木利陽とその作品』吉川弘文館といった研究成果が出ている。